

毎日が同じでない法律事務所の仕事

私はこの仕事に就いて5年目になる。その間、妊娠、出産、育児のため、10ヶ月間お休みをいただいた。妊娠して以降は外回りの担当ではなくなったが、法律事務所で働いているということを強く実感するのは、やはりこれまで経験したことのない「現場」を体験できるからだと思う。

法律事務所職員
鈴木めぐみ

誰かの役にたっているという実感

法律事務所の仕事のおもしろさは、毎日が同じでないことだ。私は現在の仕事に就くまでもにいくつかの事務職を経験してきたが、毎日同じことの繰り返しの仕事は何十年も続けられるだろうか、と常に思っていた。そんなとき、運良く現在の事務所に就職することができたのだが、想像以上に、毎日が新鮮で、仕事にやりがいを感じている。誰かの役にたっている、という実感がある。外回りをしているときは、大きなカバンに大事な書類をいっぱい抱えて霞ヶ関を歩いている自分の姿に少し酔ったりもした。スーツをパリッと着こなして颯爽と歩いている大人の女性の姿にずっと憧れていたからだ。ただし今現実の私は、我が子によだれや鼻水をつけられても平気な服装なのであるが。

常に依頼者の立場で

さて、この仕事で強烈な体験ができるのは、やはり執行の現場ではないだろうか。初めての執行の立会は、動産執行だった。その現場では、債務者が「支払いたくても私ももう仕事もなく、死ぬしかないのか」思ったりしている」などと切羽詰まった様子で話し、ああ、この人もこんなに大変なんだ、お気の毒だな、と思って聞いていた。

しかし後で先輩の話を知ったら、意外にも冷ややかな感想だった。結局そのときは、金庫はあったが、ほとんど残高のない通帳があったのみで空振りに終わった。物事を公平に見る、というのは大事なことだが、この

仕事においては、それは裁判所の役割であって、私たちは常に依頼者の立場に立たねばならないのだということを経験した最初の事件だった。

忘れられない現場での経験

そしてさらに忘れられない執行の現場がある。それは建物の明け渡しで、古いアパートに一人で住んでいる壮年期の男性が家賃を払わないので出て行ってもらいたい、とその大家さんが依頼してきた事件だった。行く前に先輩から、捨ててもいいようなスリッパとマスクを持って行くように念を押されていた。先輩曰く、どんな事件でもそれは欠かせないそうだ。

当日、ちゃんと鞆に入れて、現場に向かった。相手がちょっとたちが悪そうだったので、事務局長が同行してくれたので心強かった。そしていざ対象の部屋の扉が開いたとき、私は仰天した。中からパンツ1枚履いただけのおじさんがのそと出てきて、部屋の中はまさしくゴミの山、ゴミ屋敷だったのだ。いったいどこで寝ているのかと思うほど、すべてがゴミだった。数々の現場を経験している事務局長だが、その時の話は今でも話題になるほどだ。

事情も違えば相手も違う

毎日が同じことの繰り返しでないのは、いまやっている内勤の仕事も同じだ。債務整理ひとつとっても、事情も違えば相手も違う。だから法律事務所の仕事は飽きることがない。